

幸田町立豊坂保育園 審査委員特別賞実践提案研究会 開催レポート

2017年6月10日(土)、2016年度ソニー幼児教育支援プログラム「優秀園/審査委員特別賞」の幸田町立豊坂保育園による、「審査委員特別賞実践提案研究会」を開催しました。幸田町町長大須賀一誠氏をはじめとし、幸田町役場や町立保育園の職員の方々を中心に県内外からの保育関係者合わせて約200人の参加がありました。

以下に豊坂保育園による開催レポートを掲載します。

研究会概要

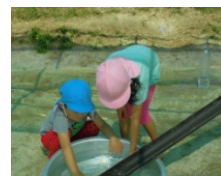
1. 日時：2017年6月10日(土) 9:30～15:40
2. 会場：幸田町立豊坂保育園
3. 主題：「科学する心を育てる」
「ドキドキわくわくやってみよう！～楽しい実体験から生まれる科学する心～」
4. プログラム
 - 1) 公開保育 9:30～11:15
 - 2) 開会式 12:30～12:45
 - 3) 実践発表 12:45～13:00 「毛ってふわふわ」
 - 4) 記念講演 13:00～14:30 演題/脳科学と幼児期の体験
講師/株式会社日立製作所 名誉フェロー 小泉 英明氏
 - 5) グループ協議 14:45～15:30
 - 6) 閉会式 15:30～15:45

公開保育

<3歳児>

園庭の土手にブルーシートを敷いたウォータースライダーでの遊び、泥団子作りや砂山を登る遊び、砂場では“樋”に水を入れて船を浮かべたり流したりする遊びをしていた。

ウォータースライダーでは、大きな歓声をあげ、寝転んで滑ったり友達と手を繋いで滑ったりと何度も繰り返すことや、友達の滑り方を見て真似るなど違う滑り方をしてみることを楽しんでいました。砂山では作った泥団子を上から転がし始めた。そして、転がした泥団子が欠けてしまうことに面白さを見付け、「もっとやってみよう」と、転がし方に変化を付けて、試して遊ぶことを楽しんでいました。



<4歳児>



子どもたちが作ったお茶やクッキーで“お茶会”をしていた。お茶やクッキーに使われていたスギナ(胞子茎はツクシ)は、春の散歩で出会った。「スギナって何？」と不思議そうによく見たり、「これ食べられるの？」と疑問をもったりした子どもの小さなつぶやきを、みんなが受け止めたことから始まった活動。スギナを調理してみて、「おいしかった」「もっと食べたい」という感想から、散歩の度にスギナ集めが始まり、興味が深まっていった。

“お茶会”では、食べてもらう時の表情をみて、「おいしい?」「これは、スギナが入っているんだよ」と、調理前のスギナを見せたり嬉しそうに説明したりする子どもがいた。恥ずかしそうに眺めている子どももいたが、自分たちで集め、作った物を食べてもらうというわくわくした気持ちや楽しさを、友達と共有していた。

また、園庭や散歩で摘んできた花を使った押し花作り、山登りや木登り、ウォータースライダー、砂場でペットボトルや“樋”を使って泥や水に触れる遊びなど、自分の興味のある遊びの中で、思いの実現に向けて、試したり、何回も繰り返したりすることを楽しんでいて。“樋”を使った遊びでは、“樋”の上に玩具の船を置き、どうやったら船が動くのかを考えたり、試したりする姿が見られた。水をたくさん入れると、船が動くことに気付き、「面白いね」「やってみる?」と他の友達も誘い、船が動く楽しさや、面白さを共感し合う姿が見られた。

< 5 歳児 >

子どもたちの作ってみたい物、切ってみたい物を相談し、身近な食材を使って、「豚汁作り」をした。子どもの一番の楽しみはコンニャクを切ることで、わくわくしながら、コンニャクを切る姿があった。コンニャク、ニンジン、玉ねぎ、ジャガイモ、ナスなどいろいろな食材と関わり、「プルプルだね!」「皮が固いね」などと、食材を持った時や切った時の感触の違い、味噌汁ができていく過程での匂いなど、感じたことを友達と共有する姿があった。また、包丁を使う時には猫の手で切るようにと、友達同士声を掛け合う姿もあった。子どものやりたい気持ちに寄り添ったクッキングとなった。そして、美味しい豚汁をみんなに食べさせたいと、愛情を込めて作っていた。

室内では、生き物の世話、LaQ（組み立てブロック）や縄跳び作りなど継続して取り組んでいる自分の好きな遊びを楽しんだ。生き物との関わり方や遊び方など、友達と一緒に考え合ったり、教え合ったりする中で、「もっと～したい」とさらに目的をもつ姿が見られた。



実践発表

昨年度の論文「科学する心を育てる～毛ってふわふわ～」について発表した。

移動動物園で出会った動物の毛に興味をもった子どもたちの発見や疑問を保育者が大切に受け止めたことから、友達同士の共有に繋がり、興味が追求・探究へと、「科学する心」が育まれていく姿を述べた。

子どもの“自分で答えを見つけたい”という気持ちと実体験を大切に、興味をもったことに、深く関わられるよう、調べることができるように、環境構成を工夫した。さらに、自分たちで育てる、作るといった実体験で気付いた情報や、興味の対象が、形を変えていく様子を共有する中で子どもの好奇心や意欲の育ちを大切にしていっていった。

保育者は、子どもの疑問、問い・仮説に寄り添い、一緒に楽しみながら、共に調べたり考えたりしていくことで、ますます興味が深まっていった。そこで、保育者が子どもにとって一番の環境となることを再確認した。さらに、地域の自然環境、近隣の園や学校、保護者との連携の工夫が、子どもたちの体験を豊かにしていることを述べた。

様々な実践を重ね、今回の、「羊毛」から始まった取り組みの中で、「羊毛」「綿」「絹」といった身近な服などの素材となる繊維について、「育て」元となる物から「作る」過程を実体験を通して学んだことが、とても大切なことであり、価値のある体験となった。「なんで?」「どうして?」という未知なる世界への好奇心が、「科学する心」へと繋がっていくのだと考える。



グループ協議

約 200 人の参加者が、18 グループに分かれてのグループ協議が行われた。公開保育の姿から、「ドキドキわくわくしている場面」「保育者が、子どものドキドキわくわくに気付くために…」の 2 点を協議のテーマに、活発な話し合いが進められた。子どもの思いにどのように保育者が気付くか、関わるかについて、自分の保育に立ち返って考える姿があった

<協議の内容から抜粋>

1) わくわくしていた場面

- ウォータースライダーを楽しむ姿がとても良かった。飽きることなく遊んでいた。
- 「みんなで滑ってどうだった?」「3人で滑ったら楽しかった」と会話があり、後に、4人5人と増えていき、子どもたちで考えて遊びを楽しんでいた。皆、笑ってとても楽しそうな雰囲気があった。
- 子どもたちが遊ぶ目線に自分も立ってみることで、子どもの思いが見えた。
- ブルーシートを使う発想がいい。
- ペットボトルホースの流れ、水の溜まり方を長い間見ていることが楽しい様子だった。言葉がなくても楽しさを感じていることが分かり、それを保育者が見守っていた。
- 散歩で土手滑りをよくするが、いろいろな滑り方を工夫しているつもりであるが、子どもたちが自分で滑り方を考えられると良いと思った。
- 泥んこ遊びでは、水を“樋”にたっぷり入れる姿、夢中になる姿が見られた。
- スギナをフライパンで炒っている時、「どんな匂い?」「わぁー、いい匂い!」と目がキラキラしていた。
- スギナ茶を出す姿にドキドキ、モジモジする恥ずかしいけど、自分たちが作ったという、嬉しそうそうな姿が見られた。
- 押し花遊び…ラミネートの中が見えないので、そこから出てくる時の「どんな風に出てくるかなあ?」と覗く顔がわくわくしていた。
- 土手や木登りができる木などがあり、見ている自分自身が環境にわくわくした。



2) ドキドキわくわくに気付くために…

- 環境設定からドキドキわくわくを作る。
- 大人自身も楽しいと、子どもも楽しい。
- 子どもを信じることで、子どもとの繋がりができる。
- 縦の繋がりも大切。年上の遊びの真似をすることで、遊びが広がる。
- 子どもが楽しく遊んでいる様子を、写真等で保護者に伝えることの大切さを感じた。
- 大人が先に、良い方法を子どもたちに与えてしまうのではなく、子どもたちが感じ、つぶやき、考えるきっかけを作っていくこと、子どもが主体になることを心がけている。
- 子どもの姿をじっくり見守る。その中から、子どもの声をひろい受け止めるが、決めつけた言葉かけをしないことを大切にしている。



記念講演

小泉英明氏/ (株) 日立製作所名誉フェロー

『[「科学する心」を見つけようフォトコンテスト](#)』の画像（[滑り台上で転がすドングリを転がす子ども](#)）と、ガリレオ・ガリレイの落体の法則に結び付けて、子どものしていることがいかに、科学の本質に直結しているかについて、述べられた。また、幼児期に育つ「科学する心」について、「自然の素晴らしさに深く感動する心、そして好奇心」「真実を率直に認め、事実を決してごまかさない心」「偏りや思い込みなしに、素直に判断し行動する心」「自然の中に生かされる、命を大切にすること」「多様性を尊び、相手を思いやる心」の5つについて、脳の発達の視点から具体的にお話いただいた。



さらに、「脳構造の進化」「化石からみた古生代とそれ以前の生命進化」などの脳科学のお話しに関連付けて、「科学する心」を育てることは、豊かな人間を育てることであることを述べられた。最後に、乳幼児の子供の体験を、園が「サイエンス」の視点で研究することは、世界レベルで見ても注目されており、今後の教育に果たす意義がいかに大きいかを強調された。

<「他園に学ぶ保育者研修」※への参加者による報告書より抜粋>

- 子どもの気付きや不思議に大人が理由を伝えるのではなく、子どもたちから興味を引き出して共に追求していく。また小さい年齢からしっかりした教育を受けていくことで大人になってからもやる気・情熱がもてる。そして、幼児期の「科学する心」とは、小学校の理科のようなものではなく、子どもの意思・意欲・興味を引き出すものであることを学んだ。

脳内には脳幹(生命を維持する脳)・古い皮質(生きる力を駆動する脳)・新しい皮質(より良く生きる脳)があり、「幼少期に入ってこなかった情報は大きくなってから入れても入らない。そのため大きくなってから創造的にやらせるということは難しい。自発的に動き、結果を体験することで脳は学んでいく」というお話が印象に残った。

- 幼児期は、自分で答えを見付け出していく過程を大切にしていく。自分で考えて確かめたいという気持ちが好きになる気持ちに繋がり、自分で見付け出したという自信、情報に価値がある。楽しいからこそ次もやってみようと思う。人間の最初の段階でその部分が発達するというお話を聞いて、今が一番大事な時期なのだと改めて感じ、この時期にしっかりと自然に触れて様々な経験や体験を積みあげて感性を育てることが大事なのだと明確に理解することができた。
- この幼児期は豊かな体験を繰り返すことで、感情豊かな人間を育てることに直結するというお話が納得でき、今後の保育実践に活かしていきたいと思った。
- 小さい時の体験は、大人になった時に大きな影響を与えるということに驚いた。そして、小さい時に「感性・意欲」を育てることの大切さを再確認した。今、自分たち保育に携わるものが、その手助けをして、「科学する心」の芽生えや心の発達に繋げていきたいと思った。

※他園に学ぶ保育者研修…

「科学する心」をテーマに取り組みされている幼稚園・保育所・認定こども園に所属する保育者の方々が、他園の保育から学び、主題の理解を深め、自園の保育の質の向上に繋げていく研修の機会を支援するため、ソニー教育財団が実施している助成制度。[詳しくはソニー教育財団のホームページをご覧ください。](#)